

「短歌・俳句、それぞれの表現」(二年)

小冊子を作って短歌・俳句に出会う

新しい国語の教材化を考える会

短歌・俳句に「出会う」

今まで、短歌や俳句については、それぞれ教科書に掲載されている作品を順番に解説して終わるといった教師主導の授業が多かった。しかし、授業時数が週四時間から三時間と減ってしまった現在では、今までのような形の授業を持続するのが無理になった。また、今回の教科書改訂で、二年生に短歌と俳句がいっしょに、しかも読み物教材として登場した。

そこで、この機会に思い切って従来の授業の形を改め、「読むこと」と「書くこと」の両方を取り入れ、生徒がいきいきと活動する授業を提案してみたいと思う。その際、いちばん大切なことは、曰くろ、短歌や俳句にふれる機会の少ない生徒に、どのような目的をもって短歌・俳句と出会わせるかということである。これまでのように、作品に広く浅くという扱いでは、どの歌(句)も漠然とした印象で終わってしまう。大切なのは、歌(句)

に込められた思いにきちんと出会うことだと思う。

作品に感動をもって出会うには、表現を深く味わい、さらには作者の思いにふれる体験をさせることである。もちろん凝縮された表現形式であるだけに、豊かな想像力も必要とされる。これを育てるためには、指導者の解説は最小限にして、生徒一人一人に一つ一つの作品の表現とていねいに向き合わせることが必要だと考える。

短歌や俳句に親しもうという気持ちで育つことを願い、次の三点をふまえて単元を構想した。

1 「短歌と俳句、それぞれの表現」の特徴を理解する教科書に「短歌は喜びを歌い、悲しみを歌い、また人生活感などを歌います。」とあるように、短歌は人の思いと生活感を表すことを得意とする。一方、俳句は「写真のようなものだ」「対象と作者の心が触れ合う瞬間を、まるでカメラのようにとらえる詩だ」とある。

それぞれの表現の特徴を教科書掲載の短歌と俳句の全文から読み取らせたい。

思い、短歌・俳句について自分が調べたことを小冊子の形にまとめ、紹介し合うという実践を計画した。

2 短歌・俳句の「作者との出会い」

近代短歌の革新運動をおこなった正岡子規の短歌と俳句を例にして、作者についての知識をもって作品を読む、漫然と読むのとは違った味わいが出てくるということを理解させた。

指導の実際 全4時間扱い

単元名 小冊子を作って短歌・俳句に出会う

指導目標

- 一、韻文の特質を学び、親しむ態度を育てる。
- 二、好きな歌、テーマに合う短歌や俳句を求めて、資料集や学校図書館を利用するなど広い範囲から情報を集め、情報を効果的に活用させる能力を身につけさせるとともに、読書生活を豊かにしようとする態度を養う。
- 三、収集した情報をもとに創作をし、編集してわかりやすく伝える力を育てる。

3 「総合的な学習の時間」の練習・導入として、短歌・

俳句の小冊子を作り、紹介し合う

本校では、総合的な学習の時間に「自分の好きなテーマで調べ学習をして、それをわかりやすく伝える力をつける」という課題に取り組ませることが予定されていた。そのため国語の授業がまずその糸口となるようにと



指導の流れ

第一次 短歌と俳句の表現の特徴を知る 1・5時間

「短歌と俳句、それぞれの表現」を読み味わう。
短歌と俳句の特徴を理解する。
短歌と俳句の革新 「聞き取りメモ」を書く。

